



飯能市子ノ権現の碑

やがてかつらは保のいびきをきいた。  
そつと手をのぼした。  
手さぐりで保の手をとった。  
背ばかりのびても、  
まだほんの少年の手だった。  
朝まじいにつつ、  
今夜ひと晩ねむらなくてもいい…  
と、かつらは思った。

所沢市山口観音境内の碑

東松山市下唐子の碑

「大地の園」第一部学びの門より／久しぶりに実家に帰った「保」と布団を並べて寝ることになった母「かつら」の思い。

## 打木村治と「天の園」「大地の園」

1904(明治37)年、大阪に生まれた村治は、父の病気を機に、母方の実家のある唐子村(現東松山市下唐子)に移りました。川越中学(現川越高校)を経て早大に進み、卒業後は大蔵省に入りますが退官して作家となりました。

打木村治の自伝的小説「天の園」の続編「大地の園」の第一部は、主人公、河北保の川越中学への入学から始まります。

主人公、保少年は若き日の村治であり、作中で丸川製糸(石川組製糸)に女工として勤める姉久仁子は打木国代(村治の姉)です。久仁子に恋心を抱く白泉良輔(白井良助)の父幸助は、石川組製糸創業者・石川幾太郎の弟で、後に石川組製糸の副社長に就任します。また、保のおじさんの銀行家、堀中剛平のモデルも、実業家の発智庄平(元豊岡町長、繁田武平の兄で、霞が関C.C.の創設者)です。

このように、「大地の園」には豊岡(入間市)や川越、入間川町(狭山市)、飯能といった地域の人々や建物、景観等が登場します。そして、武蔵野の美しい自然、物欲にとらわれない“ほどよい貧乏”、家族、知人、地域の人々などの愛情と、少年少女が織りなす冒険や体験、友情など、心打たれる物語りが展開されます。また、母や姉など女性の生き方も大きなテーマの一つとなっています。

そこで、この小説をNHKの朝ドラ化を目指し、入間市と埼玉県西部地域の街おこし、活性化を図りたい所存です。周知のとおり、NHKの朝ドラは高視聴率であり、日本の子育て環境に一石を投じることになるとともに、地域に及ぼす影響は多大なものとなるでしょう。

表面左上書籍：偕成社文庫 打木村治著「大地の園」より